
河城にとりの科学的？生活

さかまた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

河城にとりの科学的？生活

【Nコード】

N5753T

【作者名】

さかまた

【あらすじ】

幻想郷に高くそびえる妖怪の山に住む河城にとり。

彼女は今日も気ままに幻想を生きる。

そんな彼女と親友たちが織り成す物語。

プロローグ

川辺に小さな家がある。家主の名前は河城にとり。機械いじりと人間が大好きな風変わりな妖怪だ。

今日も彼女は何処からか拾ってきたガラクタをいじっている。ふいに家の戸をコンコン、と叩く音がした。どうやら来客のようだ。

「まったく、今いいところなのに。はいはい、今開けますよ」

彼女はそう言って立ち上がると戸の前まで行き、戸を開けた。

「おっ、盟友。久しぶりだね。また面白い物を持ってきてくれたのかい？」

彼女が盟友と呼んだ人間は、そう聞かれると背中に背負っていた箱をとりの前に置く。

「ふーむ、変わった箱だねえ。てっぺんから細い針金みたいなのが出てるね。あと、側面にはクランクが付いてる」

にとりは箱の外見をじろじろと見たり、側面のクランクを回したりしている。

「うーん、何も起こらないなあ。それにしても、このクランクやけに重いね……え？ もっと速く回してみろって？ うん。わかった」
そう言われてにとりはクランクを目一杯の力で回す。

回し始めてしばらくすると、箱の上部にある針金が光り出した。

「おおっ！ 光った光った！」

にとりが驚きの声を上げる。しかしにとりがクランクを回す手を止めると、すぐに針金は輝きを失ってしまった。

「あーや、もう終わり？」

「ふう……うーん、確かに面白い機械だけど、ずっとクランクを回してないといけないのは疲れるね」

盟友がそれに頷く。

「これをどうにか改良すれば、こんなちっぽけな針金だけじゃなくてあの吸血鬼の館にあるらしいグリルとかいうやつも使えるようになりそうだね。電気力で炎を作って操る……想像しただけでも楽しくなってきたよ」

にとりが声を弾ませて言う。

「そういえば聞いてなかったけど、この機械はなんて名前なんだい？ 盟友」

にとりが聞くと、盟友は”えれきてる”と答えた。

「エレキテル？ 変わった名前だね」

それを聞いた盟友は少し苦笑し、それから二人は世間話をしたり、機械をいじって過ごした。

「でさ、そのせいで前は花に負けちゃったんだけど……ありゃ、もうこんな時間？ 盟友、そろそろ帰らないと危ないよ」

二人が会った時には頂上に昇っていた太陽が、もう地平線の向こうに沈みかけている。

「しかし、こんな面白い物を作るなんてやっぱり人間はすごいね……私も頑張らなくなっちゃ！ あ、このエレキテルもらってもいいかな？ いろいろバラして中身見たいからさ」

盟友は首を縦に振った。

「本当？ ありがとう盟友！ じゃあ次は私が何か盟友に作って見せてあげるね！」

にとりは今日一番の笑顔を見せる。

「それじゃ盟友、また今度ね！」

そう言って二人はハイタッチを交わして別れた。

射命丸文のカメラ

人里の外れに一軒の家がある。その家主は、普通の人間なのだが一人で妖怪の山に何のためらいもなく入って行くなど、どこか風変わりな点があるので道士かなにかの修行でもしているのではないかと人々から不思議がられていた。

太陽はもう昇っているが頂上まで昇るにはまだまだ時間がかかるようだ。

家主は朝食を摂りながら、今朝拾ってきた天狗が空からばらまいたのであるう新聞を読んでいる。

新聞によると幻想郷は昨日も平和でとくにたいした事件はなかったようだ。だが今回は毎週恒例”今週の弾幕”コーナーがなかった。カメラ故障の為お休み、とのことだ。カメラが故障したのなら天狗はあの子のところに持っていっただろうから、後で行ってみるかな、と彼は思った。

川辺のにとりの家に着くと、案の定彼女はいつもより慌ただしく動いていた。

「おや、盟友。……さては今朝の新聞読んで、カメラが私のところに修理に出されてると思ったでしょ？」

にとりはどうだ、と言わんばかりに得意げな顔をする。

盟友は照れ臭そうに頭をかきながら

「……当たり前」

と呟いた。

「やっぱり！　しかしあの新聞からカメラが私のところにあると考
えるなんて、盟友は目の付け所が違うねえ。で、見てみたい？　カ
メラ」

「当然。何の為に朝からここに来たと思ってるんだい？」

盟友は即答する。

「うむ、盟友がそこまで言うなら仕方ない……これだあ！」

そう言っでにとりは大袈裟にカメラを空に掲げた。

「へえ、人里の写真屋が持つてるやつみたいに大きくないね。……
中身見ていい？」

「どうぞどうぞ。あなた様のお好きなように」

にとりはへらへら笑いながら冗談っぽく腰を低くして答え、カメ
ラを渡す。

「よし、では早速……よつと」

盟友はカメラの裏側の蓋を開ける。すると糸巻に巻かれた薄い茶
色の半透明の膜が現れた。

「なるほど、薄い感光板を糸巻に巻き付けてるのか。写真を撮った
らこれを回せば毎回撮るたびにカメラを開けなくて済むから、これ
なら弾幕の中でも何枚も写真を撮れるのも納得できるね」

盟友は分析しながら感心している。

「フィルムって言うらしいよ。文さんが言ってた。あと本気出せば
フィルムをおもいつきり速く巻けるらしいんだけど、それやると巻
くのに集中しちゃって機敏に動けなくなるからたまに弾に当たっ
ちゃうんだって」

「へえ、フィルム、か。しかしあの素早い天狗が弾に当たるなんて、
よっぽど本気で巻いてるときは集中してるんだ」

にとりの説明に相槌をうちながら盟友はフィルムを外してさらに

奥をのぞく。フィルムの先には鏡が入っている。可動式のように、指で押すと上に跳ね上がった。どうやらこの鏡でどのように写るか確認し、撮る直前に鏡が上がって撮影する仕組みのようだ。鏡が上がったさらに先には大きなレンズがあり、こちらを見つめている。

「フィルム、鏡、レンズ。あとは……」

カメラの右上のボタンを押す。が、ボタンは固くなっていて、作動しなかった。

「……シャッターが作動しなかったから、悪いのはシャッターみたいだね」

盟友はカメラをにとりに返しながら言う。

「うん。まあ盟友が来る前に一回私も中を見て一応目星は付けてたんだ。あと悪いところはフィルムを付ける軸が歪んでたくらいかな。で、どうだった？ 楽しかった？」

「もちろん。カメラなんて商売道具、写真屋は絶対触らしてくれないから、カメラは本でしかしくみは知らなかったから、貴重な体験だったよ」

「それはよかった。ん？ その風呂敷に包んであるのは何？」

にとりが盟友が片手に持っている風呂敷を指して言う。

「今気づいたんだね……はい、差し入れ。」

盟友は風呂敷の包みを解き、包まれていたきゅうりを数本にとりに渡した。

「おおっ！ きゅうり！ 気が利くね、盟友。これで昼の後の修理も頑張れるよ。ありがとう！」

「どういたしまして。さて、差し入れも渡したし、帰ろうかな」

「あ、待つて」

にとりが引き止める。

「お昼……食べてきなよ。せっかくここまできたんだしさ」

「いいのかい？ じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおうかな。」

「よし、今日のお昼は二日漬けたきゅうりの漬物になすときゅうりの炒め物、後きゅうりチャーハンで決まり！」

「これでもかってほどきゅうりづくしだね……」

盟友は少し苦笑する。

「えー、いいでしょ？ 今日盟友がきゅうり持ってきてくれたんだし、悪くなる前に食べなきゃね！」

にとりが盟友に笑いかける。彼もそれに笑顔で返す。

「そうだね。じゃ、お昼の準備をしようか。僕も手伝うからさ」

「え？今日は盟友はお客なんだから、手伝わなくていいよ……」

「いいからいいから。さ、始めよう」

太陽はいつの間にか頂点まで昇っていて、太陽の光を川の水が反射して輝いていた。

河城にとりの光学迷彩

新しい朝が来た。外では鶏が甲高い声で鳴いている。

彼は家から出て、天狗の新聞を拾いに行く。毎度のことながら、人里にまで新聞を配りに（ばらまきに）来る天狗はなかなか律儀な妖怪だと、ふと彼は思った。

「それに比べて河童は……」

そう言いながら彼は屈んで足元に落ちている新聞を拾おうとする。だが、

「？」

彼が新聞を拾おうとすると、新聞は彼を拒絶するかのように彼から離れていつてしまった。

「河童が何だつて？」

聞き慣れた声にあわてて顔を上げると、目の前には青のワンピースに緑の帽子、左右で束ねた青い髪が特徴の彼の親友、河城にとりが立っていた。

「うわあっ！」

突然の出来事に彼は尻餅をついてしまった。

「あはははっ！　びっくりした？」

にとりは悪戯っぽく笑う。

「……うん、ホントにびっくりしたよ」

「やったあ！　実験大成功！　あと盟友、おはよう！」

にとりは笑顔で盟友に挨拶する。

「ああ、おはようにとり」

盟友も笑顔で挨拶を返し、それから二人はぱしん、と手を合わせる。

「っと、まだ朝早いから外で騒いでたら迷惑だし、一旦家に入ろうか」

「それもそうだね。わかったよ」
そう言って二人は盟友の家に入っていく。

「そういえば盟友」

「ん、何？」

「さっき『それに比べて河童は……』って言ってたけど、なにと比べて？」

盟友は少し硬直する。

「あ、ああ。あれね。毎朝人里にまで新聞を配りに来る天狗は律儀だなあ、って」

「ふーん。で、天狗に比べて河童は何？」

にとりはいつもより少し鋭い目で盟友を見る。

「気まぐれで悪戯っぽくて、子供っぽいなって思った。あと……」
「あと何？」

にとりは膨れっ面をして言った。

「……やることが面白い、かな」

それを聞いたにとりの顔が少し戻る。

「むう……最初はばかにされたような気がしたけど、やることが面白いってのはあんまり悪い気はしないね。でも子供っぽいってのは聞き捨てならないなあ、盟友？」

「……ごめん。あ、そうだ。今から僕は朝ごはん食べるから、にとりも朝から何も食べてないなら一緒にどう？」

「お、気が利くね盟友。じゃあ一緒に過ごさせてもらおうかな。あ、朝食に免じてさっきのことは許してやろう！」

「気が変わるの早いなあ」

盟友は苦笑して、朝食の仕度を始めた。

「ごちそうさま、他人の家で食べる朝食もなかなかいいもんだね」

「まあ、普通は家に泊めてもらわない限りそうそう朝食は他人の家じゃ食べないよね。……そういえばにとり」

「ん？」

「さっき実験大成功とか言ってたけど……新しい発明でも作った？」
盟友がきく。

「うーん、別に新しい発明じゃないよ。少し改良した感じかな。そういう盟友にはお披露目してなかったね」

にとりはリュックの中をこそそと探り始める。

「……まさか」

「そう！ そのまさか！ 私、河城にとりの最高傑作の一つ、その名も光学迷彩！」

にとりは高らかにそう言つと、リュックの中から半透明な雨合羽のようなものを取り出した。

「おっ、話には聞いたことあるけど見るのは初めてだよ」

盟友は思わず拍手する。

「ふふふ、まあまあ抑えて抑えて」

にとりは少し照れ臭そうにしている。

「でもそれ博麗の巫女とか普通の魔法使いに簡単に見破られてたよね」

にとりの顔が少し曇る。

「ぐ……仕方ないじゃんか！ 光学迷彩ってのはさ、繊細なものなんだから弾幕ごっこなんて過激な遊びには向かないの！」

「……じゃあ聞くけど、どんな使い方が正しいのさ」

「それは……盟友が拾おうとした新聞をパツと奪う、とか……」
にとりは目を逸らしながら言う。

「あれやつぱり君の仕業だったんだ……ってか悪戯くらいにしか使えないじゃない？」

それを聞いたにとりが憤慨する。

「失礼な！ 他にも使い道はあるってば！ ……今思いついてないだけで」

「……まあいいや。じゃあ原理を教えてください。」

盟友は少しあきれた顔をしながら言う。

「もちろん。まず盟友はどうやって物が目に映るかわかる？」

「えーっと……どうだっけ？」

「光が物体に反射して、その反射した光が目に入るから、見えるんだよ」

「……そうだった気もする」

盟友は少しずつ思い出そうとする。

「だから、その反射した光が相手の目に入らなかったら、相手にはその物体は見えなくなる、この原理を光学迷彩は利用してるんだ」
「なるほど」

「本当は光を完全にすり抜けさせることができれば最高なんだけど、ほぼ不可能に近いからさ、光を少しずつずらしてずらしてずらして……ってのを繰り返してそれに近い状態を作り出すんだ」

説明するのが楽しくなってきたのか、にとりの口調が速くなる。

「へえ……でも、どうやって？」

「私の能力……知ってる？」

「水を操る程度の能力でしょ？」

「当たり前。その能力を使って小さな水のレンズをたくさん光学迷彩スーツの表面に発生させるんだ。それがさっき言ったように光を少しずつずらしていく、するとあら不思議！ 光はほとんどが反射せずに通り返けて行って、周りにはほとんど姿が見えなくなるって算段さ！」

「なるほど。大体はわかったよ。弱点は何かあるの？」

「弱点？ えっと、レンズは水だから、雨の日は雨と一緒に流れちゃうんだ」

「なるほど、雨の日は使えない、と」

盟友はいつの間にか説明を紙に書き留めていた。

「で、悪戯以外に何か使い道はないの？」

にとりはしばらく考える。

「うーん、思い付かないなあ」

「あんまり過激なことはできそうにないしなあ、こっそりどこかに忍び込む…とか？」

「忍び込む………そうだ！」

「ん？何かひらめいた？」

「紅魔館に行こう！」

「へ？」

にとりは突拍子もないことを言い出した。外では鶏は鳴き止み、かわりにすずめが平和そうに鳴いていた。

紅魔館

「紅魔館に行こう！」

始まりはにとりの突拍子もない一言からだった。

「ごめんととり、もう一度言ってくれるかい？」

「だから、紅魔館に行こうって言ったんだよ。盟友。うーん、忍び込むって言う方が正しいかな」

盟友の顔が青ざめる。

「どうして君はそんな危ないことを考えつくんだい？ 普通に近づくだけでも危険だって言われてるのに！」

紅魔館に近づくと門番に捕まって、館の主の吸血鬼に食べられてしまふと人里ではもっぱらの噂だった。

「大丈夫、大丈夫。光学迷彩があるんだしさ」

そう言っでにとりは光学迷彩を持ってかざして見せる。

「本当に大丈夫なの？」

盟友がまだ不安そうに言う。

「心配性だなあ盟友は。光学迷彩がしっかり効くのは盟友も確認済でしょ？ さ、いこつ！ まだ朝だし、吸血鬼だって寝てるって」

「あつ、ちよつと！」

にとりは光学迷彩をリュックにしまふと、盟友の手を取って外に出た。外はまだ静かで、鳥のさえずりだけが聞こえていた。

森を抜け、二人は紅魔館の近くにある霧の湖までやって来た。今日はあまり霧は深くなく、湖に突き出した土地に建つ紅魔館がよく見える。

「さてと、そろそろ潜入の準備をしようか。はい盟友、一応もう着

「といてね」

にとりはリュックを降ろし、中から光学迷彩を取り出して、盟友に渡した。

「あれ、僕に渡しちゃっていいのかい？」

「いいのいいの。予備があるからさ」

彼女はそう言ってリュックからも一つ光学迷彩を取り出し、上から羽織って少し伸びをして彼に向き直る。

「んー、よし！ 準備完了！ 盟友、急ごうか。こんな格好してたら妖精たちが集まってきて潜入どころじゃなくなっちゃうからね」
確かに雨でもないのに合羽を着ている姿はいささか滑稽だと彼は思った。

「ほら、あそこが正門だよ」

草むらに隠れているにとりが盟友に耳打ちする。

「……まさか正門から堂々とする訳ないよね？ いくら光学迷彩があっても……」

「大丈夫。当然一番安全な場所から入るよ」

「ならいいんだけど……」

「お、門番だ」

彼女の言う通り、門の近くに肩まで届く赤い髪に緑色のチャイナドレスを身に纏った、紅美鈴が立っていた。

「……噂だとよく居眠りしてるって聞いたんだけど、今日はばっちり起きてるね。ま、起きていようが無かるうが正面から入る気はさらさら無いんだけどね。盟友、何をあたらう」

盟友は黙って頷くと二人は音をたてないよう気をつけながら正門から離れた。

それから二人は紅魔館の側面に回った。側面は正門付近とは異なり、手入れが行き届いていないのか水際近くまで雑草や木が生い茂

っているし、庭を囲む柵は所々穴が空いている。警備も木陰で妖精メイドがサボって昼寝している程度だった。

「正面ほど警備は厳しくないみたいだね」

周りを見て盟友が呟く。

「まあ、侵入者は空から入ってくるしね」

「侵入者？」

「ああ、魔理沙のこと」

「ふーん……あ、にとりにとり！」

盟友が目醒まして伸びをしている妖精メイドを指さす。

「オーケー、光学迷彩展開！」

にとりはそう言って光学迷彩の表面に水のレンズを発生させる。

するとレンズは光を全反射に近い角度で屈折させ、たちまち二人の姿は見えなくさせた。まだ眠そうな目で持ち場に戻るらしい妖精メイドは二人に気づくこともなく素通りしていく。

「よし！ うまく機能してるみたいだね。上出来上出来。それじゃ

あ、あの窓から中に入ろうか」

「……どの窓のこと？ 指さしてるんだろうけどわからないよ」

光学迷彩を展開しているので、盟友には指さしているのがどの窓かわからなかった。

「あ、そうだったね。ごめんごめん」

その声が聞こえたのとほぼ同時に、盟友の目の前にあった窓ガラスが音をたてて割れる。盟友は気づかれたかと後ろを振り返るが、幸い妖精メイドはもう見えなくなっていた。

「これだよ、この窓。さあ、潜入するよ！」

「……もつと用心しようか」

盟友はにとりの無用心さに半ばあきれていた。

二人は延々と長い廊下を歩いている。廊下は薄暗く、等間隔に吊

るされたランプだけが周りを照らしている。床には赤い絨毯が敷かれ、壁紙もまた赤い。

光学迷彩は切つてある。さすがのにとりも常に展開していると疲れようだ。

「しつかし長い廊下だね……悪趣味なくらい赤いし、飾り気もないし……お、でつかい扉。魔理沙が話してた図書館かな？」

それまでぶつくさと文句を言っていたにとりの顔が明るくなる。

「じゃあ盟友、久しぶりに光学迷彩を展開するよ」

盟友は軽く頷く。にとりはそれを確認すると光学迷彩を展開させる。

「さーで、どんな本があるのかなあ！ わくわく」

彼女は期待に胸を弾ませながら重い扉を開いた。木でできた扉が軋む音が広い図書館に響き渡る。

「誰？ ……レミイ？」

奥から声がした。

「やばっ！ 盟友、静かにね」

「……にとりこそ」

ナイトキャップのような帽子を被り、薄紫のローブを着たパチュリー・ノーレッジは羊皮紙の上を走らせていたペンを止めると、首を傾げた。

「……おかしいわね。気のせいだったかしら。……小悪魔、見てきて頂戴」

「はい、パチュリー様」

赤い髪に頭と背中に生えた羽、白い上着に黒いベストとロングスカートが特徴のパチュリーの使い魔である小悪魔は抱えていた本を机に置くと、入口の方へと向かった。

「んー。おかしいですねえ……誰もいないです……」

小悪魔は扉の周りを見回すが、何処にも人影は見えない。

「盟友、まだ静かにね」

「わかってるよ」

侵入者の二人はぼそぼそと喋りながら入口近くの本棚の彼女が戻るのを待っている。

「確かに物音はしたのになあ……んー」

小悪魔は頭を抱えながら戻っていった。

「ふう……どうやらまいたみたいだね、盟友」

にとりは光学迷彩を解除し、額の汗を拭うそぶりを見せる。

「別に見つかったわけじゃないんだけどね……」

「まあね。それじゃあ盟友、せっかくこんなに広い図書館に来たんだし、めぼしい本でも探そうか」

「ん、そうだね」

二人は本棚で入り組んだ図書館の奥で床にいくつか本を広げて、読みはじめた。

「うー、どれもわけわかんない魔法陣についての本ばかりだよ……つまらないなー。もつと機械についての本とか滑稽本とかあると思っただのに……盟友、何か面白い本はあった？」

「そうだね……この今読んでいる話は面白いよ」

彼は手に持っているにとりの横に詰まれている本とは違った、和綴じの本を渡す。

「どんな話？」

にとりは渡された本をのページをばらばらとめくりながら聞く。
「とある猫の話だよ。その猫から見た人間が描かれているんだ。そこに出てくる人間がおかしくてね……それにけちをつけたりする猫もまた面白いんだ。それで、ああ、人間の行動は傍から見たらなかなかおかしいことをやってるんだな、とか考えさせられるんだ」

「面白そうだね、その本。……いいなあ、盟友は気に入った本が見つかってさ。私は面白そうな本が見つからなかったのに……」

にとりは肩を落とす。

「まあまあ、そう気落ちしないで……」

「むー」

にとりが膨れっ面をしていると、部屋中にふいに鐘の音が鳴り響いた。

「あ、パチュリーさまパチュリーさま、お昼の鐘ですよ。お昼食べに行きましょう」

「……私はこれ書き上げてから行くから小悪魔は先に行つて……」
パチュリーはだるそうに答える。

「そんなこと言わずに、行きましょ」

「……いや、私は一回くらい食事しなくても死なないし……」

小悪魔の表情が厳しいものに変わる。

「だめですよ！ そんなこと言つてほつといたらこの前一日中飲まず食わずで魔導書のまとめ作業やつて倒れたじゃないですか！ 今日は何がなんでも来てもらいますからね！」

小悪魔はそう言つてパチュリーを机から引きはがし、図書館の出口へと連れていった。

「……むきゅー」

「……さっきのは昼の鐘かな？」

「多分そうだね……！ しっ！ 誰か来る」

にとりは急に動きを止めた。

「……だいたいパチュリーさまはずっと図書館に籠つてたら黴臭くなるとか考えないんですか？ それにあの時はお嬢様だつて心配して……」

「わかった、わかったから……」

パチュリーは煩わしそうに小悪魔に手を引かれて図書館を後にした。

「行っただけだね」

「うん、行った」

本棚の陰から二人はその一部始終を見ていた。

「……苦労してるんだね、あの人」

盟友が気の毒そうに言う。

「うんうん、ああいうお節焼きな奴がいると困るよねえ」

「え、そっち!？」

「え、パチュリーのことじゃないの!？」

二人は互いに驚いた顔をし

「……やっぱり人間って変わってるなあ」

「……やっぱり河童って変わってるなあ」

同時に言った。

「む……まあそれは置いて、これからどうするの？」

「……パチュリーの机を物色したら、帰ろうか」

「……いいの？ 勝手に漁っちゃって」

「ばれなきゃ大丈夫だって。……それに紅魔館に不法侵入してるし

……さて、どんな珍しい物があるかなあ！」

にとりは再び目を輝かせながら図書館の奥へと進んでいった。

「ふーん、意外とごちゃごちゃしてるんだね」

にとりは本が左右に積み上げられた机を見て言う。

「羽ペンにインク……珍しいもので字を書くんだね」

盟友は羽ペンを手に取って関心している。

「お、盟友盟友、顕微鏡だよ！ これは撮っておかなくっちゃね」

にとりはリュックから小さなカメラを取り出し、顕微鏡を写真に収めた。

「そのカメラはどうしたの？」

「この前カメラを修理した後、つくりを簡単にして作ってみたんだ。フィルム交換ができないから使い捨てだけど、レンズを小さくしてしっかりピントを合わせなくてもきれいに撮れるようにできたよ。名前をつけるとしたら……『撮れるんです』とかかなー」

にとりは顕微鏡を撮りながら得意げに話す。

「問題は四枚しか撮れないことだね……あ、一枚余っちゃったけど、まあいいか。さて、やることはやったし、帰ろうか」
「そうだね」

「さて、入口のホールまで来たわけだけど……もういつそのこと光学迷彩の力を試すためにも正門から堂々と出ようか！」

盟友が驚愕のあまり固まる。

「男は度胸！ さあ、行くよ！」

にとりは彼の手を引いて外に出る。

外に出ると太陽はてっぺんまで昇っていた。

「はっ、ここは？」

盟友は我に帰る。

「正門だよ盟友。ちょうど門も開いてて、門番もお昼寝中だ。出るなら今のうちってね！ それじゃ、お先にー」

「ち、ちよつと！」

にとりは光学迷彩を展開して正門を抜けようとする。

だが突然座り込んで寝ていた美鈴が立ち上がり、

「この気……曲者ッ！」

「え？」

見えないはずのにとりを蹴り飛ばした。にとりはそのまま宙を舞い、紅魔館の時計台を越えると思えなくなった。しばらくして、何

かが水に落ちる音が聞こえた。

「にと……あ」

盟友は自分の光学迷彩の効果が切れているのに気がつく。にとりが気絶したためだろうか。盟友はさつと塀の陰に伏せて隠れる。

「……ハッ！ いけない私ったら、また寝ぼけて…… もう昼だし休憩しに行こうかな。妹様も暇してるだろうし」

美鈴は太陽を見て時間をぴたりと言い当てると、紅魔館の方へ歩いていった。

盟友は美鈴が見えなくなると、一目散に門から逃げ出した。

盟友が湖を見ると、にとりが水際に打ち上げられていた。彼は近づいて声をかける。

「にとり、にとり」

「う、ん、盟友？」

「大丈夫？ 思い切り蹴飛ばされてたけど」

「だ、大丈夫。うん。落ちたのが湖でよかったよ。リュックの中身が潰れたら多分私泣いちゃってたよ。…… ってもう日が暮れそうだね」

にとりが空を見上げると、空は夕焼けで真っ赤に染まっていた。

「じゃあ、最後に一枚紅魔館をバックに撮って、今日はお開きにしようか」

にとりが提案すると盟友は頷いた。

「あ、ちよつとその君いいかい？ 写真撮ってくれないかな？」

盟友は湖を飛んでいる妖精に声を掛ける。

「ほう、あたいに声をかけるとは、知らない人間もお目が高いね。いいよ！」

声を掛けられた妖精、チルノは偉そうに言う。

「ありがとう」

「えーと、このボタンを押せばいいの？」

「そうそう、よく知ってるね」

にとりが褒める。

「ふふん、天才に知らないことなどない！」

チルノは得意げに胸をはる。

「うん、すごいすごい。……じゃあ紅魔館と僕たちが入るように撮ってね」

「任しといて！……はい、笑って！」

カシャツというシャッター音が響く。

「よし！ 完璧なのが撮れたよ！ 天才でさいきょーのあたいが言うんだから間違いなし！ それじゃ、あたいはいそがしいからじゃあね」

「ありがとう」

二人はチルノにお礼を言いつと、湖を後にした。

「一時はどうなるかと思ったけど、なんとか帰れたね」

帰り道の途中、盟友が口を開く。

「そうだね…… 最後以外はハプニングなくやれたね」

「……でももう二度と行かないよ」

「あんまり収穫なかったしね」

「そういう問題じゃなくてさ……」

「他に何かあるの？ …… あ、そろそろ人里だよ。それじゃ盟友、またね！」

「うん、また今度ね」

二人は挨拶代わりのハイタッチをして別れた。

まだ日は暮れておらず、空は夕焼けで真っ赤に染まっている。あのカメラにもう一枚フィルムが残っていて、この夕焼け空を写真を撮れたらいいのに、と彼は思った。

河童と厄神様

彼が目を醒ますと、太陽はすでに中天まで昇っていた。

「……いけない、寝過ぎてしまった」

彼は身体を起こすと家から出て、新聞を取りに行く。が、昼近くになるともう新聞は何処にも落ちていなかった。

「さすがに落ちてないか」

彼は新聞捜しを諦め、家に戻ってかなり遅いが朝食を採ることにした。

「さて、今日は何をしようか」

「うーん、いたた。昨日のが今になって効いてきたなあ」

にとりは昨日美鈴に蹴り飛ばされたときの痛みが今になって効いてきたようで、朝起きてからずっと布団に寝転がっていた。

「今日はどうしようかな……朝ごはん食べてから考えよ」

彼女は布団に寝転がりながら枕元に置いておいた壺からきゅうりを取り出し、かじる。

「……しよっぱ。漬けすぎたかな。失敗失敗。次は気をつけよ。さ、もう一本……あだだ」

彼女は全身に軽い痛みを感じながら壺に腕を伸ばし、さらにきゅうりを手に取る。

「さて、今日は何をしようかな……」

彼女はきゅうりをかじりながら考える。体が痛いからあまり外に出たくない。だがこうして家でだらけているのをあのお節介焼きな雛に見られたら面倒だ。

「にとりー、いるかしらー」

外で彼女を呼ぶ声がした。噂をすればなんとやらだ。

「いないのー？ 入るわよー」

やめろ、入ってくるな。そうにとりが言う前に雛はドアを開けてにとりと対面した。

「お、おはよう。雛」

布団に寝転がったままにとりが挨拶する。

「あら、おはようにとり。……まだ寝てるの？ だらしないわね」

緑の髪を小さなリボンで前で束ね、黒に近い濃い赤の上着に白いフリルが縁に付いた赤いスカート、そして頭のてっぺんに乗った大きなこれまた赤いリボンが特徴の鍵山雛が白い歯を輝かせながら笑顔で辛辣な一言を放った。

「うぐ……しょうがないじゃないか。昨日あの、その、足を滑らせて崖から転げ落ちちゃって全身が痛いんだよ……」

「紅魔館に忍び込んだら門番に蹴り飛ばされた」などと言えるはずがなく、にとりはとっさにごまかした。

「あつ、そう！ ……まあ！ それは大変ね」

言動が一貫していない、今日は厄が足りないんだな、にとりは直感した。

「どうでもいいのか、心配してくれるのかはつきり……」

「どれどれ……」

「あがつ！ 痛い痛い痛い！」

雛は加減せずに思い切りにとりの腰を押す。

「うーん、これは重症ね。医者じゃない私でもわかるわ」

「はあつ……はあつ」

痛みでにとりの息は切れ切れで、目には涙が浮かんでいた。

「このままじゃしんどいでしょうから、薬草を採ってくるわ。それまでじつとしてるのよー」

そう告げて雛は出ていった。部屋に静寂が戻る。

「柎……盟友でもいいや、誰か助けて……」

「……とはいったものの、どれが薬草かわからないわ……」

雛はそれらしき草を見つけてもそれが薬草かはわからず途方に暮れていた。

「誰か薬草に詳しい方はいないかしら……」

雛はふわりと飛び上がり、くると回って辺りを見回す。

「んー、……いたいた！　もしもーし、その兎さーん」

「え？　私ですか？」

彼女が声を掛けたのは、兎耳のついた淡い紫色の長い髪に紺色のブレザー、そして見た者を惑わせるような赤い瞳が特徴の鈴仙・優曇華院・イナバだった。

背中には大きな箱を背負っている。人里に薬を配りに行く途中だったようだ。

「そうよー。あなた、永遠亭の子でしょう？　友達が体を痛めちゃってね、薬になる草を探してるんだけど、どれが痛みに効くやつか教えてくれないかしら？」

「痛みに効く薬草、ですか？　それなら薬草を集めなくてもいいものがありますよ」

鈴仙は背負っていた箱を下ろすと、中から小さな容器を取り出した。

「それはなあに？」

「師匠の新薬ですよ。使いやすい患部に塗るタイプで筋肉痛、腰痛、関節痛、打撲によく効きますよ」

薬について説明が始まると、人懐っこかった鈴仙の声がどこか事務的になる。

「へえ……」

「内容成分はインドメタシン10mg、これは非ステロイド性の鎮痛消炎成分で、筋肉や関節の痛みをとってくれます。そしてメントールが30mg、患部にひんやりとした清涼感を与えて、痛みやか

ゆみをやわらげてくれます。あとは添加物としてミリスチン酸オクチルドデシル、アジピン酸ジイソプロピル、カルボキシビニルポリマー、ヒプロメロース、ステアリン酸ソルビタン、ステアリン酸グリセリンを配合して効果の持続力と速効性の向上を……」

「あつ、そう！……よくわからないけどすごい薬なのはよくわかったわ。ありがとう。一つ貰ってもいいかしら？」

「ええ、どうぞ……それでは私はこれで失礼します……せつかく覚えたのになあ……」

鈴仙は説明を唐突に切られ、肩を落として去っていく。

「あ、一つ言っておくわ」

「何でしょうか……」

鈴仙はゆっくりと振り向く。

「薬の成分なんて普通の人にとってはどうでもいいから話さなくていいと思うわ。いろいろとありがと、じゃあね」

そう言い残すと雛はまたくると回りながら飛んでいった。山には「あんまりだあー！」という鈴仙の叫び声が響いた。

彼は何の気もなしにただ人里の大通りを歩いていた。昼時を過ぎて、またあちこちに活気が戻ってきている。

「兎のお嬢ちゃん今日は元気ないね。何かあったのかい？」

「いえ大丈夫です……はい。落ち込んでなんかいませんから……腰痛の薬でしたね、どうぞ」

「あ、ああ。ありがとう」

「うちの子が風邪引いちゃってね、風邪薬もらえる？」

「はい……」

いつもと違って元気の無い薬売りの兎を不思議に思いつつ、その近くに建つ本屋を見て、最近本屋に寄っていないことに彼は気づいた。今日はとくにやるべき事もないので、彼は久しぶりに本屋に入

ることにした。

「ごめんください」

彼は軽く挨拶をしながら暖簾をくぐる。

「いらつしゃい。お、仙道の兄ちゃんじゃないか。久しぶりだね」

店の奥にいた店主が笑顔で返す。

「……何度も言ってますが私は仙道じゃないですし、そのための修行もしてませんよ」

彼は少し苦笑する。

「そうだったっけ？ まあ細かい事は気になさんな。で、今日はどんな本を探してるんだい？」

「……特に探している本は無いですね。最近入った本でおやじさんのおすすめはありますか？」

「そうだな……『突撃！ 命蓮寺！』はなかなか面白かったぞ」

店主は平積みされた本を一冊手に取る。

「……どんな本ですか？」

「毎朝新聞ばらまいてく天狗がいるだろ？ その子が最近できた寺の住職さんとお話する本だよ。所々話が噛み合ってなくて笑えたよ」

「面白そうですね。買います」

「まいどあり、3000円な」

彼の財布に延ばした手が一瞬止まる。

「……高くないですか？」

「お布施込みの値段らしいけど、天狗の言うことだからな、どうだか」

店主は肩をすくめた。

天狗のただの口実かもと思いつつも、彼は買うことにした。

「また暇なときは寄ってくれよ」

「ええ、もちろん」

そんなやり取りを交わしながら彼は本屋を後にした。

空が赤くなり始めた頃、雛が薬を持ってにとりの家に戻ってきた。
「にとりー、薬持ってきたわよー、入るわよー」

返事を待たずに雛は家のドアを開ける。

「……あら、寝てる。待ちくたびれちゃったのかしら。まったく、仕方ないわね」

雛はにとりの腕と脚に薬を塗り、書き置きを書く。

「これでよし、と。しっかり寝るのよー」

雛はにとりに小声で別れを告げ、家から出た。

「……さむっ」

雛が帰ってしばらくして、にとりは腕と脚の寒気で目が覚めた。

「どうしてこんな手足だけ寒い……痛くも無い……あ、書き置きだ。雛のかな」

書き置きには薬を塗っておいたから安心してよく寝るように、と書いてあった。

「雛……ありがと。お節介焼きだと思つてごめんね」

にとりは書き置きを読み終えると、今度お礼しなくちゃな、と思
いながら外に出た。雛が塗ってくれた薬のおかげか夜風がいつもよ
り冷たく、心地よく感じられた。

河童と厄神様（後書き）

後書きを書くのは初めてですね。

さかまたです。

今回は初めて盟友以外にとりと関係のあるキャラとして雛を出しました。

雛はなかなかキャラ付けが難しかったです。世話好き、というのは決まっていたのですが……今回は天然が入ったようなキャラになっていました。

雛は好きなキャラの一人ですので、これからもたまに出せたらいいな、と思っています。

番外編：月の兎と月の頭脳（前書き）

今回は番外編です。
にとりたちは出てきません。

番外編：月の兎と月の頭脳

迷いの竹林を鈴仙・優曇華院・イナバはとぼとぼと歩く。落ち込んでいるのか、いつもはぴんと立っている耳は力無く垂れていた。

「あ、鈴仙おかえりー。今日は夕飯いらないからよろしくー」

彼女が永遠亭の門をくぐると他の兎たちと話していた因幡てゐが声をかける。

「ただいま……」

鈴仙は力無く挨拶を返すとそのままいつてしまった。

「元氣ないなあ、鈴仙。師匠に怒られるようなことでもやつちゃったのかね。やれやれ、最近の若いのはすぐ落ち込むんだから……」

てゐは小馬鹿にした口調で首をすくめる。

「うさつ！」

てゐの肩をてゐとは色違いの黒のワンピースを着た兎がぽんぽんと叩く。

「ああ、ごめんごめん。じゃあ話を続けようか」

「うさうさつ！」

他の兎たちがてゐを囲むように座る。

「それから私は鰐に皮を剥がされてしまってね、痛い痛いと言き叫んでいたところをある人が助けてくれたんだ……」

てゐは老人のように木の枝を杖代わりにして再び話し始めた。一言言い終えて振り返ると、既に鈴仙の姿はなかった。（何があったか知らないけど、氣負いすぎちゃ駄目だよ……）

「あらウドンゲ、お帰りなさい。今日は遅かったわね、私が夕飯作ることになっちゃったじゃない。まあ、こういうのもたまには悪くないんだけど……あら、いつになく落ち込んで、何かあった

の？」

腰に届く程長い銀色の髪を三つ編みに束ね、割烹着を着た八意永琳が振り向きながらきく。

「師匠おゝ聞いてくださいよおゝ」

鈴仙が永琳に飛びつく。

「あらあら、どうしたの？」

「実は……」

茶の間に移った鈴仙は永琳に今日のいきさつを話した。

「ふーん、厄神様もなかなかきついことを言うのね……」

「ですよねえゝ！ 私すつごく勉強したのに……」

涙をぼろぼろと流しながら話す鈴仙。それを永琳はお茶を啜りながら落ち着いて聞いている。

「ふつつふ、騒がしいと思ったらまた鈴仙が人生相談してるみたいね。さて、今日はどんな永琳節が炸裂するのかしら……」

そして隣の部屋で笑いをこらえながら聞き耳をたてている人影が一つ。艶やかに光る黒い髪に鮮やかな装飾の入った着物を身に纏った、蓬萊山輝夜だ。

「でも厄神様の言うことも一理あるわ」

「ええっ！？ じゃあ今までの私の頑張りは……」

（おっ、珍しく否定から入った）

「だって自分の興味のない話を延々とされるのは聞いている側から見れば苦痛でしかないわ。ウドンゲ、もし姫様が魚の小骨の上手な取り方と刺さったときの対処法について一時間語り続けたら嫌でしょう？」

「はい……」

（私を例えに出すな！ 鈴仙も即答するな！）

「じゃあ私の話もその類に入っているんですね……」

鈴仙は悲しそうな顔で視線を落とす。

「そうよ。でもね……」

永琳は額に手を当て、深くため息をついた。（あれは永琳節の始まりのポーズ！）輝夜は襖に更に耳を近づける。

「あなたが人里で相手をするのは一人じゃないでしょう？ 薬を貰いに来る人の中には医者のお卵がいるかもしれないし、そういう小難しい話が好き、っていう物好きな人もいるかもしれないし、果てにはあなたがけなげに説明する姿を見るためだけに訪れている人もいるかもしれない……」

（山彦は妖怪の仕業、って話くらいありえないわ……）輝夜もあきれたように額に手を当てる。

「そういう人に薬の成分を聞かれたときに答えられなかったら、周りの人たちの信用を失いかねないわ……」『作った人にもよくわからない薬を私たちは使っていたのか……』ってね。二度と来るなど人々に石を投げられるだけならまだしも、最悪の場合そのまま廃業に追い込まれてしまうのよ！」

「そ、そんな……」

（な、なんだってー！……って、ないない、いくらなんでもそれはない）輝夜は首を横に振る。

「そんなことにならないためにも、薬の勉強は欠かしちゃいけないのよ。わかった？」

「はい！ 師匠！ わざわざ相談に乗ってくださり、ありがとうございます！」

（……今日も綺麗に丸め込んだわね。丸め込まれる鈴仙も鈴仙だけど。……もしかして永琳、医者より講師の方が向いてるんじゃないかしら）

「話し込んでしまったわね。ウドンゲ、料理を並べておいて。私は姫様を呼んでくるから」

「わかりました」

（やばっ、部屋に戻らないと）輝夜は足音を立てないようにこっそりと、しかし素早く部屋に戻った。

「カゲヤ、夕飯の用意ができたわよ」

部屋に入ってきた永琳が言う。彼女は昔からの約束で二人だけのときは名前で呼んでいる。

「んー？ ああ、あいわかった」

輝夜はだるそうにゆっくりと立ち上がり、永琳に手を引かれて部屋を出た。夜風が心地よい。

「今日は私が夕飯を作ったの。久しぶりだったから張り切っちゃったわ」

「永琳が張り切るなんて、期待しちゃうじゃない（……鈴仙もう少し落ち込んでいいぞー）」

「何か言ったかしら？」

「うっん、なんにもー」

輝夜は目を合わせないようにして答えた。

番外編：月の兎と月の頭脳（後書き）

今回は落ち込む鈴仙を極論で無理矢理元気付ける永琳、というネタが浮かび、ちょうど前回鈴仙が登場したので書いてみました。さかまたです。

わりと思いついたままにやりました。稀なケースですね。どうも私が永遠亭の話を書くキャラがペラペラ喋る話になる気がします。初めて書いたSSにしか出してませんが……永遠亭組は好きです。でいつかまた主役のSSを書きたいなー、と思ったり。

永琳が深刻そうに言えばどんなに嘘くさい話でも鈴仙はコロツと騙されそうです。すぐばりますが。

永琳「実は蓬莱の薬はね……ただの風邪薬なの」

鈴仙「な、なんだってー」

永琳「嘘よ」

こんな感じに。

扇風機

夏、妖怪の山に小川のせせらぎと蝉の鳴き声がこだまする。一方は涼しさを、もう一方は夏の到来と蒸し暑さを人々に感じさせる。

「ふんふん」

朝からにとりは鼻唄まじりに川辺で機械をいじっている。部屋でやっている蒸し暑くなるから、とのことだ。

服装はいつもの水色の作業着のような服ではなく、水色のハーフパンツに黒のタンクトップ、服装だけ見れば少年のようにも見えた。「あとはカバーをはめて……よし、完成！」

にとりはプロペラが入った四角い箱を持ち上げる。

「さあ、早速動かす実験だ！」

そう言うてにとりは発明品を抱え、意気揚々と自分の家に戻っていった。

「ただいま……うげ」

ドアを開けた彼女を待っていたのはむせ返るような熱気だった。

薄着だというのに汗がとめどなく流れる。

「あつ……どうして窓閉めたんだろ。こうなるのはわかりきってたでしょ……もー、私のバカ」

まあ、この扇風機ですぐに涼しくなれるさ、と彼女は気持ちを切り替えて中身がぎゅしりと詰まった道具箱から蓄電池を取り出し、扇風機を繋ぎ、扇風機のスイッチを入れる。電気力でモーターが作動し、プロペラによって涼しく、心地よい、暑い夏を吹き飛ばす風が発生する……

「おー、涼しく……ない……」

ようなことはなく、プロペラは目に見えるほどゆっくりと数回転すると止まってしまった。

「えー、なんでかな……、まさか」

にとりのはつと蓄電池のメーターを見る。メーターは残量ゼロを表すEの部分を示していた。

「なあんだ、バッテリーが切れてただけかあ……根本的な問題じゃないか、使ったら充電は徹底しないとなあ……こんな暑いのに充電するの、やだなあ……」

彼女は不満を漏らしながら部屋の隅に鎮座する自転車に跨がった。

この自転車はもともと香霖堂に置かれていたものだったが、舗装などされていないため路面が悪く、ほとんどの妖怪は急ぐときは空を飛ぶので自転車など幻想郷では無用の長物である。店主の森近霖之助もたいして気に入ることもなく、前述の理由で売れもせず、香霖堂の隅で埃を被るだけの存在になっていた。そうして持て余していたところをにとりは譲ってもらい、今はこうして発電器として使っている。

「うおおおおおお！」

にとりは一心不乱に自転車をこぐ。外を走れば空を飛ぶ霊夢にぎりぎり追い付くことができるかもしれない程度の速さだ。

十数分こいだだろうか。自転車に付けられたベルが鳴る。充電完了の合図だ。

「お、終わったあ……」

にとりはペダルから足を離す。だがペダルはそのまま回りつづけ、にとりのくるぶしをしたたかに打つ。

「あつ、つつ……」

安堵の表情から一転、声にならない叫びをあげ、苦痛の表情を見せたにとりは自転車から転げ落ちた。しばらくそのままうずくまつた後、にとりはそのまま這って扇風機の前に向かう。窓を開け、換

氣した方がどう考えても早いが、そんな選択肢は彼女にはなかった。彼女を今動かしているのは好奇心と、扇風機の生み出す涼しさへの期待感だった。

「へ、へへ……」

部屋中をはいずり回り、ようやく扇風機の前に辿り着いたにとりは、待ってましたと言わんばかりに扇風機の電源を入れ、風の強さを一番強い「台風」に入れた。

「わぁお……」

虚ろだった彼女の目に光が戻っていく。体からはいまだに風で乾かしきれないほどの量の汗が流れ出し、床に人型の染みを作る。

「……しあわせー」

このしあわせはみんなにも分け合わなければ、と彼女は思い、しばらく涼んだ後早速二個目の扇風機を作ることにした。

昼時を過ぎた頃、家に訪問者がやってきた。

「にとりー、入るよ……うわ」

彼が家に入ると、むせ返るような熱気が肌にまとわり付いた。床には大きなぬめくじが這ったかのようにぬめった黒い跡が残っている。おそろくにとりの汗だろう、と彼は思った。

「おお、その声は盟友だね……よく来たね。ちょうどよかった、今この恐ろしく暑い、灼熱地獄のような夏を乗り切る道具ができたんだ」

にとりは扇風機で元気を取り戻したとはいえ、まだしんどいようだ。二人は挨拶代わりに手を合わせる。彼女の手は汗でぐっしりと濡れていた。

「おおう……それより窓締め切ってて家の中すごく暑いけど、にと

りは平気なのかい？」

盟友は家の窓を開けながらきく。熱気の籠った家の中、外の比較的涼しい風が入ってくる。

「へいき、へいき。……この扇風機があれば、ね」

にとりは轟音を響かせながら風を送る、四角い箱を指さした。

「扇風機？ 涼しそうだけど、ずいぶんとやかましい機械だね」

「ああ、それは安心しておくれ、盟友。使ってるモーターがこれだけは無駄に強いやつになってるからさ。普通のモーターにしとけばそんなにやかましくはないはずだよ」

「そうかね？」

「構造は簡単だから結構楽に作れるんだ。とりあえずもう一個できてるから、盟友にあげるよ。あと、電源用に道具箱から適当なバッテリーを持って行ってね」

「本当かい？ ありがとう。早速今夜使ってみるよ」

今夜も暑いだろうしね、と付け加えると、盟友はにっこりと笑った。

「いやあ、喜んでもらえたみたいでよかったよ。さて、私は今から他の友達に渡す分の扇風機を作るつもりなんだけど、手伝ってくれるかい？ 盟友」

「そうだね……まあ、ここまで来たんだし、手伝わせてもらおうかな」

少し腕を組み考えた後、盟友は頷く。

「ほんと？ 悪いねえ、それじゃあ早速だけどその工具箱からレンチ持ってきて」

にとりは作業を再開し、空いた片手で隣に置かれた箱を指さす。

「はいはい」

「それから接着剤とフェムトファイバー、あとジャンク箱から単相誘導モーターを、それに……」

遠慮なくこき使おうとするにとりを見て、長い一日になりそうだと彼は思った。

長い手伝いが終わり、彼はようやく家に帰ってきた。日は既に沈んでいる。

「……まだ暑いな。早速使ってみようかな」

彼は扇風機を立て、発電器を回す。数分間回し続けて、疲れきたところで扇風機のスイッチを入れる。

「おお……」

プロペラが回り始め、春のそよ風のような心地よい風が流れる。

「家にいながら涼しい風を感じられる機械……いい夏の風物詩になるかも」

彼は呟いた。

日がすっかり沈んだ頃、にとりの家に再び訪問者がやってきた。

鍵山雛だ。

「こんばんは、にとり。今日も暑かったわね。元気だったかしら？」
彼女は片足を引き、スカートを軽く持ち上げてにとりにお辞儀をした。

「こんばんは、雛。おっそろしく暑かったけど、元気だよ。あ、昨日は……その、いろいろとありがとね」

にとりは挨拶を交わし、照れ臭そうに礼を言った。

「あら、友達なんだからお礼なんていいのに。でも、ありがとうって言われるのはやっぱり気分いいわね……どういたしまして」

「でさ、お礼と言っちゃなんだけど、私が作った（盟友も手伝ってくれた）発明品をあげるよ」

にとりは扇風機を指さす。

「不思議な箱ねえ……」

「扇風機って言うんだよ。天狗様みたいに風を起こせるんだ」

「へえ、風を起こす機械ね……」

雛は不思議そうに扇風機を眺めている。

「使い方はね、すつごく簡単なんだよ！　まずこの手回し発電器で電気を作って、そのあとは扇風機の電源を入れるだけ。ね、簡単でしょ？　原理はね……」

「……私は機械に詳しくないし、話を聞いてもよく理解できないと思うから原理までは説明はしなくていいわ。ごめんね」

雛は申し訳なさそうに、だがつぱりと言った。

「そう……まあ、いいや！　雛、早速使ってみてよ。充電は済んでるからスイッチ押すだけでいいよ」

にとりは少し落ち込みながらも手に持てる程小さな扇風機を雛に渡し、雛は言われた通り、スイッチを押す。すると、心地よいそよ風が流れた。した。

「まあ素敵……」

「でしょでしょ？」

雛のほころんだ顔を見てにとりも嬉しそうに笑う。

「そうだ！　こんなふうにも遊べるんだよ。……あー」

にとりが扇風機に向けて声を出すと、声がしゃがれて聞こえた。

「ね？　面白いでしょ？」

「ふふ、あなたは本当に楽しいことを考えつくわね」

「えっへん！」

雛にほめられ、今度は自慢げに胸を張るにとり。傍から見ると親子のようにも見えた。

「ねえ、にとり」

「なあに？　雛」

「これを使って、お空を飛べないかしら？」

「それは……さすがに無理だよ」

「あらあら」
雛はおどけたように笑った。

扇風機（後書き）

今年の夏は節電で扇風機が大活躍してますね。
さかまたです。

河童の科学力はどこかが異常に高く、しわ寄せでどこかが極端に低いイメージがあります。ロマンがないから研究しない、という分野もありそうですね。

河童と白狼天狗

窓から朝日が差し込む部屋に、じゃらじゃらと駒を転がす音の後、
ばちん、という音が響いた。

「……王手、これで詰みだね……私の勝ちい……」

にとりは伸びとも取れるほどゆつくりと両腕を空に突き上げる。
目の下には薄く黒い隈が浮かんでいる。

「ああー、連敗かあ……」

修験者のような装束に身を包んだ犬走栂は逆にがつくりと肩と耳
を落とし、うなだれた。

「さて、次は何して遊ぼうか。本将棋は飽きたし、回り将棋でもし
ようか？ それとも挟み将棋？ あ、崩し将棋もいいね……」

「……少し将棋から離れようか」

栂は眠い目をこすりつつ、将棋はもううんざりだ、というような
表情で言った。さすがに『天狗一の将棋狂い』とまで言われる栂も、
夜通し将棋三昧というのは堪えたらしい。

「そう？ じゃあ、運動でもする？」

にとりは部屋の隅に鎮座する発電用の自転車を指さす。

「いや、それ遊びじゃないし……それに久しぶりの非番の日なのに、
そんな労働まがいのことしたくないよ」

栂は肩を軽く回しながら言う。

「えー、充電完了までの時間を競うのとか楽しい……んだよ？」

「嘘つけ」

「あ、ばれた？ ごめんごめん」

「ほんつと、にとりは嘘が下手だね」

にとりのつく嘘はすぐにばれる。嘘をついたときにいきなり目を
そらしたり、手がせわしく動いてしまうからだ。

まあ、屈託のない笑顔でさりと嘘をつくあの人に比べたらわか
りやすいことはいいいことなのだが、と栂は思った。

「は、ハハハ。……お酒飲む？」

にとりは氷水がなみなみと入った箱から一升瓶を取り出した。

「はぐらかさないの。それにこんな朝から酒飲むとか、鬼じゃあるまいし……まあ、休みだしっか」

椀ははにかみながら差し出された猪口を手に取る。

「そうそう、ずっと仕事づくめじゃあ息も詰まるでしょ？ たまには息抜きも必要だって。ささ」

にとりが猪口に酒を注ぐ。

「うーん、趣味で生計立ててるにとりが言つとなんだかなあ……」
「えー」

「はは、何はともあれ、乾杯」

「うん、乾杯」

二人は猪口をかちやん、と音をたてて合わせると、一気に中身を飲み干した。

「うん、美味しい。どんちゃん騒ぎの宴会もいいけど、親友と静かに飲むのもいいもんだね」

椀が言う。

「だね。……そうだ！ つまみにきゅうりの漬物はどうだい？」

にとりはうんうん、と頷きながらと壺からきゅうりを取り出し、椀に渡す。

「にとりはきゅうりが好きだね。じゃ、頂こうかな。……辛っ！」

「あ、やっぱり？」

「やっぱりって……」

「しかしこんな朝から飲んでるとき、文さんが『宴会と聞いて飛んできました』とか言ってやって来そうだね」

「え！？」

椀は急に立ち上がると窓から身を乗り出し、辺りを見回した。外は蒸すように暑く、じいじいと蝉が鳴くだけだ。

「……よかった、あの人はいない」

にとりは文の話を始めた途端いきなり慌てだした椀を少し不審に

思った。

「……そういえば椛」

「何かな？　にとり」

「椛は文さんのこと、どう思ってるの？」

天狗の社会は完全なタテ社会だ。部下が上司を立てるのは当然とされている。

「えー？　……いつも明るくて、人当たりもいいし、いい人だと思うよ」

「本音は？」

そのため上司の悪口など素面なら口が裂けても言えない。だが酒の席で、しかも二人しかない状況なら何か聞き出せるかも、ということでにとりは深く踏み込んだ。

「ちよつとめんどくさい人……仕事中に気にせず話し掛けてくるのはやめてほしいなー、とか」

「あー、うん」

ビンゴ。

「この前忙しいから話しかけないでください！　って怒ったら次の日の新聞に誇張されて書かれてたし……」

椛は猪口を傾け、空にする。

「あー、あれね……」

あの日の大見出しは『低下する下っ端天狗のモラル！』だった。彼女には悪いと感じながらも、あの時は腹を抱えて笑ってしまったことをにとりは思い出した。

「あれ大天狗様が真に受けちゃってさ、あの後こっぴどく叱られちゃったんだよ。『上司に手を出すとは何事だ』ってさ……ああもう」

椛は、目に浮かんだ涙を拭い、猪口を傾ける。

「……悪いね。なんか湿っぽい話になっちゃって」

「いや、私は平気……だよ？　うん」

嘘。こうした話は聞いていると自分もつらくなるのでにとりは苦手だった。

「そう？　じゃあもう少し私の話を聞いてくれるね？」

「ありゃ……うん」

わかりやすいと言っていた嘘を見抜けなかった、これはかなり酔っているな、とにとりは思った。

「……もう職権濫用とかそういう次元じゃないんだって！」

「うん……うん」

椀の愚痴が始まって一時間程経った。床には空の瓶が数本転がっている。にとりはもう勘弁してくれ、という表情をしているが椀は気づかない。

「……上司の前とか取材のときだけいい子ぶっちゃってさあ！」

ふいに騒がしかった蝉の鳴き声が止み、部屋にさっと涼しい風が吹き抜けた。

「もっと部下にも優しくしてくださいよ、文さんの馬鹿あ！」

「もみじー？」

誰かが彼女の肩をたたく。

「誰ですか！　今いいところ……ろ」

振り向いた彼女の前には短く切られた黒い髪に小さな帽子を被り、首からカメラを提げた射命丸文がとてもいい笑顔で立っていた。

「あ、ああ文さん！？」

急に椀の顔が青ざめる。いきなり極楽から地獄に真つ逆さま、といったところだろうか。

「ふふふ……見つけましたよ椀。朝からこんなに飲んで……日ごろの鬱憤は晴れましたか？」

「め、めめめ滅相ありません！　お、お許しを……」

椀は床に頭をこすりつける。もし床が熱い鉄板だったとしても謝り続けるだろう、というくらい勢いよく。さすがに見えていられない

のでにとりは目をそらした。

「あやや？ 私に何か謝ることがありましたか？ ……それは置いて、今からなんでも喰うとかいう死体を取材しに行くのですが……休みのところ申し訳ありませんが、椀も来て頂けますか？」

「よ、喜んでご一緒させていただきます！」

椀はふらふらと立ち上がり、文に最敬礼した。

「心意気は買いますが……ずいぶんと酔っ払っているようですが、大丈夫なのですか？」

「大丈夫です！ 足手まといにはなりませんから！」

「そうですね。では椀、行きましょうか。お仕置きはその後ですよ」

「ひっ……」

「それとこれとは別ですからね。……あ、にとりさん」

窓に足を掛けたところで文がにとり振り向く。

「な、なんでしょうか」

にとりもつかしこまってしまった。

「部下がご迷惑をおかけしました」

文は事務的に軽く頭を下げる。

「いえいえ」

「これからも仲良くしてあげてくださいね？」

「も、もちろんです！」

事務的な表情から一変して満面の笑みを浮かべたのでにとりは少し驚いてしまった。天狗とはこうも変わるものなのだろうか。

「では私たちはこれで」

「あ！ ……」

窓の棧を蹴って二人は飛び立った。玄関から出てほしかったが、それを口にする暇もなかった。

「行ってしまった……」

にとりは散乱した瓶を拾い集める。

「さて、雛か盟友でも呼んで飲みなおそうかな。あ、雛呼ぶと『昼から酒ってどうなのかしら？』って言われるな……じゃあ呼ぶとしたら盟友だな。じゃ、準備するかな」

彼女はいつも酒を入れている箱を開ける。

「……な、ない……」

箱には氷水が入っているだけで、酒瓶は一本もなかった。にとりはがっくりと肩を落とした。

河童と白狼天狗（後書き）

暦の上ではもう秋らしいですね。
さかまたです。

文はなにかと絡んでくるちょっと鬱陶しい上司というイメージなんです、書いてみるとイメージからズレてしまった感が……

土蜘蛛

「……よしよ、よしよ」

一人で暮らすにも窮屈になってしまふほど機械や発明品が並べられた部屋で、にとりはリュックサックに大量の荷物を詰め込んでいた。

「んー、まあこれくらいでいいかなー」

発明品やら何やらで荷物でばんばんに膨れ上がったリュックを背負うと、にとりはドアを開ける。

「いつてきま……ぐえ」

意気揚々と出発しようとしたにとりであつたが、リュックが大きすぎてドアに引つ掛かり、負い紐が首にかかる。

「荷物を詰め込みすぎてドアから出られない？　ならば」

にとりは部屋に戻つて窓を開け、外に出る。

「窓から出ればいいだけのこと！　……今度はこうならないように帰つたらドアおつきしょ」

大きく膨れ上がったリュックを背負つて窓から出てくる様は、泥棒にしか見えなかった。

「あらにとり、おはよう。窓から出てくるなんて泥棒ごっこでもしてるのかしら？」

空から聞き慣れた声が響く。山一番のお節介焼き（にとり談）の鍵山雛だ。彼女はくるくると回りながらにとりの前に着地する。

「あ、雛。おはよ。今日はね、椀が誘つてくれたから地獄の温泉に行つて来るんだ」

「あつ、そう！　……お土産期待しても良いのかしら？」

白い歯を輝かせながら、厄不足そうな笑顔で雛は言った。

「んー、何が欲しい？」

最近毎朝彼女はこの調子なので、特に言及せずにとりは続ける。

「なんでもいいわよ。……おいしいお酒をよろしく」

「うん、わかった。お土産、期待しててね！　じゃあねー」

「期待しないで待ってるわよー」

雛は穏やかな笑顔で走っていくにとりを見送った。空は綺麗に晴れ渡り、山には秋らしい雰囲気漂っていた。

地底につながる大穴の前で、犬走柎は親友を待ち続けてかれこれ三十分ちかく経っている。

「遅いなあ、にとり……」

河童はお気楽で、マイペースな種族だ。約束の時間に遅れてやってくるなどしょっちゅうである。河童どうしの待ち合わせならどちらも遅れてくるので問題はないが、河童を待つ側にとってはたまったものではない。

「柎ー、おまたせー」

「遅いよもう……」

柎があきれながら言う。

「あー、ごめんごめん。……しかし休みをくれるなんて文さん優しいね」

「うん、取材に付き合ってくれたお礼に休みを増やすように大天狗様に掛け合ってくれたんだ。……優しいのか厳しいのかやっぱりよくわかんない人だよ。いい人なのはわかってるんだけどね」

柎はやれやれ、といった表情で肩をすくめた。

「さて、それじゃあ飛び込む前に……やっほー！」

にとりは深さを調べるために大穴に向かって叫んでみた。大穴から声が返ってこなかったところを見ると、かなりの深さのようだ。（代わりに少し遅れて山のほうから「ヤッホー」という声が返ってきた）

「……うん、この深さなら落下傘を持ってきたかいがあったってもんよー！」

にとりは大きなリュックサックから小さめのリュックサックを取り出す。

「落下傘？ それはなんだい？にとり」

椛は不思議そうに言う。

「これは人間が高いところから降りるときに勢いを殺して安全に降りるための道具だよ。開き方はね、このヒモを……」

「ああ、説明はしなくていいよ。早く行こう、ね？」

「むむむ……わかったよ」

にとりは話の骨を折られたため、少し不満そうに答える。

「準備はいい？」

「もちろん。……せーのっ！」

二人は同時に穴に飛び込んだ。

椛はそのままの勢いで、にとりは落下傘を開いてゆっくりと地底に降りていった。

深い深い地の底は、ここまで陽の光が届くためか、はたまたそこらどころに淡く光るキノコが生えているためか、彼女たちが想像していたよりも明るい。

椛は勢いよく、にとりは風に揺られてゆっくりと地底に足を着けた。

「にとり、別にそれいらなかったんじゃないの？ 私はそのまま落ちても平気だったしさ」

「……ちつつち、わかってないなあ椛は。こういう無駄や面倒があるからこそ一生は面白いんじゃないか。もっと椛も私のようにゆったりとした、何にも動じない心を持たなきゃ……」

にとりは落下傘を畳みながら苦し紛れに言う。

「おや、地底に遊びに来たのかい？」

背後から聞こえた声に二人が振り向くと、そこには八つのボタンのついたゆったりとしたスカートを着、金色の髪を後ろで纏め、それを茶色のリボンで留めた黒谷ヤマメが立っていた。

「げえっ！ 土蜘蛛！」

にとりが条件反射的に叫ぶ。

「なんだい、会って早々にその言い草は」

「椀、先に行つて。私はこいつをぎったんぎったんにしてやつてから行くからさ」

にとりはヤマメの不平をさえぎり、いつになく鋭い目つきで言う。土蜘蛛は毒を操る能力を持ち、水を汚すということで河童から恐れられていた。土蜘蛛は多くが地底に住んでいるのでそのようなことは杞憂だったのだが、土蜘蛛は毒で水を汚す、という話が一人歩きしてしまったため、河童の中には土蜘蛛を毛嫌いするものも少なくない。にとりもそのうちの一人だ。

「……すいませんね、なんか巻き込んでしまつて」

「いいんだよ、何はともあれ地底にようこそ。地獄は賑やかで良いとこだよ。地獄がくつろぐ、つてのもなんかおかしい感じもするがね」

椀はヤマメに深く頭を下げると、ヤマメは快活そうに笑つた。椀は彼女がにとりに対して怒っていないことに少しほつとした。

「じゃあ、先に行つてるからね。気が済むまでやられたらにとりも追いついてきてね」

「はいはい……って、なんで負けること前提なのさー！」

「さて、気を取り直して……ここで会つたが百年目、覚悟してもらふよー！」

にとりはヤマメを指さして叫ぶ。

「やれやれ、今日はそんな気分じゃないんだけどねえ……」

戦う気満々のにとりとは反対にヤマメはあまり乗り気ではないようだ。

「問答無用！ いざ、勝負！」

「はいはい、勝負勝負。……ちょっと桶借りるよ、キスメ！」

ヤマメが叫ぶと、空からにとりの頭めがけて子供が一人入れるほどの大きさの桶が降ってきた。

「あぶなっ！」

にとりがとつさに尻餅をつきながら避ける。

「おっ、あれを避けるとはあんたなかなかやるねえ」

ヤマメは小さい子供をほめるように言う。

「でも、それだけじゃあねえ。はい、確保」

そのままヤマメは糸で尻餅をついた体勢のにとりを絡めとる。大言壮語を吐いたにとりの戦いは、あっけなく終わった。

「はなせー！ 外道ー！」

「まあまあ落ち着きなつて。あ、暴れても無駄だよ。あたしの糸は鋼鉄よりも硬いんだからね」

「はなせー！ ……え？ なにそれすごい！ どういうこと？」

さっきまでの恨みがましい目つきから一転、好奇の目にとりはやマメを見る。

「ん？ あんたそんなことに興味があるのかい？」

ヤマメは不思議な生き物を見るような目でにとりを見る。

「もちろん！ こんな細い糸なのに、鉄よりも硬いなんて気にならないほうがおかしいでしょ？」

「噂には聴いてたが……河童つてのは変わってるねえ」

ヤマメはぼそつ、とつぶやく。

「そついえば、どうやったらこの糸はほどけるの？」

ヤマメは少し考える。あまり悪い奴ではなさそうだが、

「あたしを含めこれから土蜘蛛に喧嘩を売らないって言うなら教えてあげてもいいかな」

「もちろんです！」

考えるまでもなく、にとりは即答した。ヤマメは少しうろたえてしまふほどの早さだった。

「な、ならばよし！ 教えてあげよう。こう叫ぶんだ、『こら、罪人ども。この蜘蛛の糸はおれのものだぞ。お前たちは一体誰にきて、のぼって来た。下りろ。下りろ』ってね」

にとりはその言葉を復唱する。すると、不思議なことにいくら暴れても切れなかった蜘蛛の糸はぷつりと音をたてて切れてしまった。

「おお！ なんて？」

にとりは目を白黒させる。

「使ってるあたしにもよくわかんないんだよ。昔からの言い伝えなんだ」

ヤマメは肩をすくめる。

「へー、土蜘蛛って面白いね」

「なあに、嫌いな奴にまで『どうして？』って訊けるあんたの方がよっぽどおかしい……もとい面白いさ」

にとりが笑うと、つられてヤマメも笑う。

「そうだ！ この糸もらっちゃっていいかな？ 何かに使えるかもしれないし、研究したいからさ」

「構わないよ、へるもんじゃないし」

「本当？ ヤマメさんありがとう！」

にとりは笑顔で頭を下げる。

「おいおいヤマメさんはよしておくれよ。ヤマメでいいんだよ」
ヤマメは照れくさそうに頭をかく。

「……ほ、ほら！ 友達を待たせてんだろ？ 早く行ってやりなよ」

ヤマメは早く行けとにとりの背中を押す。

「あ、そうだった。じゃあね、ヤマメさん！」

だから呼び捨てでいいって、とヤマメが言いかけたときにはとりはもう走り去った後だった。

「やれやれ、旧都の鬼どもが一番だと思ってたけど、地上にも騒がしいやつがいるもんだねえ……」

ヤマメはぽっかりと空いた穴を見上げる。その先には米粒ほどの大きさの青空が映った。

旧都の旅館の一室にどこか嬉しそうな表情を浮かべて、にとりが入ってくる。

「ずいぶん遅かったね、にとり。あの人には勝てた？」

「いんや、すぐにやられちゃったよ」

「ふーん……その割には嬉しそうじゃない」

「ふふん、まーねー」

「ちよつと気になったんだけど、その糸はなんだい？」

椀は枝に巻かれた糸を指さす。

「これ？ これはね……仲直りの証、ってところかな」

にとりは少し照れながら笑った。外からはいつもと変わらぬ旧都の賑やかな喧騒が聞こえていた。

土蜘蛛（後書き）

今回もいやに会話が多くなってしまいました。
さかまたです。

蜘蛛の糸って同じ太さの鋼鉄の五倍の強さだとかきます。 ですから無慈悲な心を持っていると簡単にぶつつりと切れてしまうんですよね。

面白いですがなかなか扱いづらそうな代物です。

旧都

「さてと、そろそろ温泉を堪能しに行くとしますか！」
にとりはリュックから風呂桶を取り出し、手ぬぐいと石鹸を入れる。

「そうだね、誰かさんが遅れてきたおかげでちょうどいい時間になったよ」

椀は部屋に備え付けの風呂桶と手ぬぐいを手に取りながら軽く皮肉っぽく言う。

「いやあ、照れるなあ」

「褒めてないよ、もう」

長い廊下からん、からんと下駄で歩く音が二人分響く。床は板張り、顔が映りそうなくらい磨かれている。下駄で歩くと傷がつきそう、にとりは少し磨いた人に申し訳なく感じた。

「浴場ってどれくらいでつかいのかな？ 泳げるくらいかな？」

「泳ぐのは行儀悪いよ、にとり」

「冗談だよ、冗談」

「にとりが言うって冗談に聞こえないんだよなあ……ん？」

「すいません、ここまで来ていただいたのに……」

二人が入口の大広間まで来ると、なにやら短髪の女性が眼鏡を掛けた痩せぎすの男性にぺここと頭を下げていた。

「ソフフ、あなたのせいではありませんよ。さて、気晴らしに酒場をはしごしましょうか。さしあたり十軒ほど。ここのお酒は美味しいと聞きますしね」

「……はは」

女性は苦笑すると、男性の後について旅館の外へ出ていった。

「何かあったのかな？」

「さあ？」

桜は肩をすくめた。

「ま、いつか。気にしない気にしない。すいませーん！ 温泉入りたいんですけどー」

にとりはぱたぱたと受付の方へ走っていく。

「ええっ！？ 温泉に入れないってどういうこと？」

しばらく受付で話していたにとりが大声をあげると、桜もどうしたどうしたと走ってくる。

「すいません。さつき仙人と名乗る方がいらして『この温泉からは危ないガスが出ていて危ないから客を入れてはいけない』とか何とか……」

受付の気弱そうな青鬼が申し訳なさそうに頭を下げる。

「えー、そんなあ……」

「ほんと、すいませんねえ。こればかりは何ともありませんから……」

「うー、桜はどうする？」

にとりは落ち込んだ表情で振り返り、少し困った顔をしている桜を見る。

「……ちよつと文さんに連絡しないと。すいません、ここに電話つてありますか？ 妖怪の山につながるの」

「はい、あちらに」

二人は受付の指さした方向を見る。そこには黄緑色の電話機が十数台置かれていた。

ここ最近いきなり増えたらしい。

「長くなるかもしれないから、にとりは好きに街をまわっていいよ。終わったら向かいの居酒屋で飲もう」

「……うん、わかった。また後でね」

にとりは蜘蛛の糸の強さをその仙人とやらに会ったらとことん文句を言つてやるう、と思った。

「さて、えーつと？」

柵は受付でもらった硬貨を入れ、見慣れないブッシュホンに少し戸惑いながら上司の家の番号を押した。

秋の神が張り切っているからだろうか、妖怪の山の木の葉はもう鮮やかに色づき始めている。

「いいですかはたて、新聞というのは話題の新しさ、オリジナリテイ、そして何よりもインパクトが重要なのです！」

小綺麗にまとめられた部屋で射命丸文は雄弁に語る。机の上の書類は整然と並べられ、天井に縦横に張り巡らされた糸には写真が吊るされている。

「まあ、私も今まで新聞やってきて痛感してるけどさ……文が偉そうに語るほどのもんじゃないよ。そこまで私も馬鹿じゃないし……」
茶髪を紫のリボンでツインテールに束ねた鴉天狗、姫海堂はたては片腕で頬杖をつき、もう片方で前髪をいじりながら気怠そうに言う。

「そう！ そのだるそうな話の聞き方！ まずそこからいけないのです！」

文は大げさに仰け反りながらびしっ、とはたてを指さす。毎回歌舞伎か少年マンガのワンシーンのようなオーバーアクションをされてははたても暑苦しくてたまらない。

「まずは記者として相手の話を聞く態度をイチから
じりりん、と電話の鳴く音が文の言葉を遮る。」

「……電話だよ、文」

「わかってますよ……今いいとこなのに……はい、清く正しい射命丸でございます」

「……嘘つけ」

文の変わり身の速さに呆れ半分、感心半分で頼杖を突きながらはたてが呟く。これほど裏表がはつきり変えられる妖怪も少ないだろう。彼女の幻想郷最速とは飛ぶ速さだけではないらしい。

「もしもし、文さん？」

桜は無事に電話がつながったことにほっとした

「ああ、桜ですか。旧都はどうです？ 楽しんでますか？」

「ええ、まあ。皆さん気さくで優しいですし」

「桜い、それは私への嫌味ですかあ？」

「ま、まさか！ そのようなことは微塵も……」

いきなりうるたえ始める桜に文はくすつ、と笑った。

「冗談ですよ……あ、取材はどうなってますか？」

文は最後に声を少し低くしてきく。

彼女の言う計画とは、桜に温泉（特に女湯）を撮ってきてもらい、それを載せることで新聞の妖怪の山での講読者を伸ばそうという、楽園の最高裁判長に即地獄行きにされそうな計画だ。

「あー、その件なんですがね……」

桜は申し訳なさそうに温泉が閉鎖されてしまったことを話した。

「はあ！？ なんですかそれは！」

「つまり文さんの計画は失敗ということに……」

「………わかりました。桜、取材はもういいです。せつかくですし、あなたは『休暇』を楽しんでください。では」

文は精一杯穏やかな口調を繕い、桜の返事を待たずに乱暴に受話器を床に叩きつける。受話器越しに桜とはたての「ひっ」という声が重なる。しばらく呆然と立ち尽くした後、文は凍りつくような笑顔ではたてをじろりと見る。

「な、何よ」

「……はたて、鰻屋にいきましょ？ こんな日は飲まなければやつ

ていられませんから」

「ちょ、ちよつと！」

文はひきつった笑みを浮かべながら無理矢理はたての手首を掴む。
「あ、一緒に来てもらいますけどはたて、あなたのぶんはちゃんと払いなさいね。いいですね？」

「ひでえ……」

はたては新聞のこと以外に關しては文は反面教師だな、と引きずられながら思った。

「……文さん怖い」

電話越しに一部始終を聴いた椛は率直な感想を呟き、はたての無事を祈ってから、旅館を後にした。通りの騒がしさと明るい雰囲気
が少し、今の椛には残酷に感じられた。

旧都の外れには真赤な橋が架かっている。その橋の先にあるのは、提灯や篝火の灯が照らす旧都とは異なる、真つ暗な闇。

名前は誰が呼んだか渡る者が途絶えた橋。旧都がいつの間にか觀光地のような扱いをされるようになった今では名前負けしている気
もしなくもない。

「さーて、ヤマメさんの蜘蛛の糸は實際どのくらい強いのかなー？
実験実験！」

にとりは竿を軽く振って川に釣り針を投げ入れる。

「……釣れないなあ」

待つこと三十分、未だに竿はぴくりとも動かない。

「あら、ここで釣りをするなんて物好きもいたものね」

にとりに声を掛けたのは、透き通った碧色の眼にくすんだ枯草色

の髪をした嫉妬の塊、水橋パルスィだった。

「あなたみたいな子じゃあこの川の奴らは釣れないわよ」

「むかつ！」

「そうね……だいたい」

「おーおー河童のお嬢ちゃん、こんな美人を釣り上げるたあ、大したもんだ！」

「……あいつぐらいガタイがよくなきゃ」

パルスィは少し赤面しながら空色の着物を着、手には杯を持った鬼の四天王『力の勇儀』こと星熊勇儀を指さした。

「ははは、パルスィ、なに赤くなってるんだい？」

「……あなたの無神経さを見てて恥ずかしくなったのよ」

「おいおい、心外だなあ。あたしゃとってもナイーブな奴なんだよ？」

「あなたみたいなのがナイーブなら、幻想郷の奴らはみんなあなたにちよつと声を掛けられただけで血を吐いて卒倒しちゃうくらいナイーブってことになるわね」

「ははは、違いねえ」

パルスィの鋭い返しにも、勇儀は快活そうに笑う。

「あ、あの〜」

「おっと、仲間外れにして悪かったね。どれ、お詫びにあたしがここの釣りの見本を見せてあげよう」

勇儀は持っていた杯を置き、にとりの釣竿を借りる。

「河童のお嬢ちゃん、釣りってのは待つことが肝要だ。だがな……」

勇儀は餌を袋ごと川に放り込む。するととりが見たこともないほど大きな魚の影が餌に迫る。

「たまにはこつちから動くってことも必要だ！」

その大きな影めがけて勇儀は竿を思い切り振り上げ、釣り針を投げ込んだ。投げ込まれた釣り針は勢いよく影に突き刺さる。

「よし、かかった！……おらあ！」

獲物がかかった、というよりも引っかけたの方が正しい。勇儀は

力いっぱい竿を引くと、三メートルは優にある大魚が宙を舞い、水しぶきが真赤な橋の欄干をぬらす。あまりの迫力にとりは軽く悲鳴を上げて腰を抜かしてしまった。

「パルスィ、ちよつと竿、持っててくれ」

腰を抜かしているにとりとは裏腹に、全く微動だにせず隣に立つパルスィに勇儀は釣竿を手渡すと、指を鳴らしながら大魚を視界の真ん中に収め、

「ふっ！」

拳を大魚のどてっ腹に叩き込んだ。大魚は地響きを立てて倒れこむ。いつの間にか集まっていた野次馬から割れんばかりの拍手が巻き起こる。

「……とまあ、こんな感じかね。ここいらの魚は地上のやつらよりちつとばかりでかいからね、身体の小さい嬢ちゃんには分が悪いかな」

勇儀はまだへたりこんでいるにとりの手を取って立たせると、パルスィは黙ってにとりに釣竿を渡す。

「あ、ありがとう……」

「素直にありがとうと言えるあなた、妬ましいわ」

パルスィはにつこりと笑って言った。台詞と表情とのギャップにとりは目を白黒させる。

「ははは、悪いね。こいつはなんでもかんでも妬ましく感じちまう困ったちゃんなんだ。こんなに頼りになる奴が身近にいるってのによお」

「あら、お節焼きの間違いじゃないかしら？」

「ははは、こいつめ」

パルスィがささず修正すると、勇儀は彼女を小突いた。

「さーてパルスィ、今からこの……ええと」

「川鮭ね」

「そうそう、川鮭を肴に一杯やろうと思うんだが……一緒に飲まないかい？」

「ふふ、喜んで」

勇儀が照れくさそうに頭をかきながら聞くと、パルスィはそれに笑顔で返した。

「お嬢ちゃんも頑張ってなー」

「は、はいっ！」

大魚を引きずりながら和気あいあいとした雰囲気で二人が去っていくと、ざわざわと騒がしかった野次馬達もそろそろともと来た道を引き返して、多くは通りに乱立する酒場に入ってしまった。彼女の一本釣りの話題を肴に飲み明かすのだろうか。

「……熊みたいな人だったなあ」

一人橋の上に残されたにとりは小さく呟いた。

「まだ釣れない……どうしてかなあ？」

それからさらに一時間にとりは釣糸を垂らしているが小さい魚すらかかる気配がしない。

「釣れますか？」

「ひゅい!？」

もうやめようかな、そう考えていた矢先に声を掛けられ驚いたにとりが振り返ると、桃色の髪にシニヨンキャップを被った女性がにとりに笑いかけていた。

「い、いえ……さっぱりです」

にとりは少し戸惑いながら答える。

「そうですか。ちょっとお借りしますよ」

「あー！」

桃色の髪の女性は包帯の巻かれた右腕でにとりの持っていた釣竿を手に取ると、糸をたぐりよせた。

「ふむ、蜘蛛の糸とは珍しいものを使うんですね。おや、これは……」

針ごと喰い千切られてしまったのだろうか、糸の先に付けたはず

の釣り針は忽然と姿を消していた。これではいくら糸が強かろうが形無しである。

「ええと、これは、その……」

にとりは途端に恥ずかしくなつて口ごもる。

「素晴らしい！」

「へ？」

しばらくの沈黙を破つたのは女性の驚嘆の声だった。

「古の太公望呂尚様に倣つて釣糸を垂らして瞑想をしていたとは……」

「いやはや失礼しました」

「いや、私はただ釣りを……」

「謙遜しなくとも結構ですよ。私にはちゃんとかつていますから」

女性はぽんぽん、にとりの肩を叩く。いけない、この人は話し出したら止まらないタイプだとにとりは直感した。

「いやはや人間の数倍長く生きてきた私ですが、まさか間欠泉の温泉への転用を止めに來ただけでしたのに……旧知の友に会えて、さらに久しぶりに同じ仙人を志す方に出逢えるとは……これほど素晴らしいこと日はそうそうありません」

彼女は感慨深そうに腕を組んでうんうんと頷く。

「同じ仙人って……あなたまさか！」

「あら、自己紹介がまだでしたね。私は茨華仙と申す行者……まあ、仙人と呼んだ方がわかりやすいですね」

自らを茨華仙と呼んだ女性は胸に挿した牡丹の花に手を当てながら答えた。

「あ……」

にとりは思い出した。彼女は確か博麗神社で常温核融合の実験をやったときに八坂様や巫女たちと地獄の間欠泉がどうのこうのと話していた人だと。

「そっか、あんたが……」

にとりの中にふつふつと怒りが込み上げてくる。そうだ、こいつ

のせいで楽しみだった温泉に入れなくなっただんじやないか。一目会ったら思いっきり文句を言うんだった。うっぶんもたまってることだし、全部ぶつけてやろう！

「あんたが余計なことを」

「おおそうでした」

「はい？」

「余計なお世話かとは思いますが、先達として言うておきます」

華仙はにとりの手を握って彼女の目を凝視する。

「え、あ、あの……」

「仙人への道は厳しいです。桃の木の植え方や、炊事や洗濯、薪割りなど、本当に修行なのか？ と、思ってしまうこともあるでしょう」

「は、はあ……」

にとりは穏やかながら堂々と語る華仙に口を挟めないでいる。

「しかし、へこたれてはいけませんよ。たとえ友人に『そんなのは修行なんかじゃない、使用人のやることだ。お前は騙されてるのさ』などと嘲られることがあっても、妻に愛想を尽かされても……おつと、話し込んでしまいましたね。失礼しました。では私はこれで。貴女が立派な仙人になれることを願っていますよ」

華仙は言いたいことをひとしきり言い終えると、地上へ続く方へ歩いていく。

「ああ、それと」

華仙は何か思い出したように振り返る。

「もしそれでもくじけてしまうようなことがあったら、私の家に来なさい。私とペットたちがみっちり修行させてあげますから」

「はあ……離よりめんどくさい人だった……」

再び一人橋の上に残されたにとりは深いため息をつく。彼女の頭の中には仙人イコールめんどくさい人という方程式が出来上がって

いた。

「あ、酒場で椀と飲んだった……」

にとりはふらふらと街の喧騒の中へと入っていく。お酒くらいは気兼ねなく飲めるだろうという希望を抱いて。

「へいらっしやい！」

「にとりー、こっちこっち」

酒場は外よりも騒がしかった。

「何にしましょう？」

「えーっと……ビールと、あと漬物」

「何の漬物で？」

「あー、……ナスとキュウリで」

「へい。そちらさんは？」

「日本酒『大江山』と、手羽先とトンカツ」

「合点承知！」

にとりは途切れ途切れになりながら、椀は物おじせずにはつきりと注文した。

「肉ばっかりなんて、がつつりいくねえ椀」

「ただぶらぶらしてただけだったけど疲れちゃったからね。どこもかしこも騒がしくってさあ、落ち着けないのなんの」

「あー、わかるかも。そうだ！ 聞いてよ椀、私仙人さんに会っちゃってさあ……」

にとりは堰を切ったように話し出す。会ったときの雰囲気やら、文句を言おうとしたらいきなり長話をされたことやらをにとりの主観たっぷりに話した。

「仙人ねえ……それだけ聞くとおしゃべり好きなお姉さん、って感じもするね……」

「そうそう！ 仙人さんってもっと頭が長かったり、白い髭を生や

してそんなイメージだったんだけどなあ」

「それは偏見だよ……」

柊は手羽先を、にとりは漬物をかじりながら話す。どちらも味が濃く、酒によく合った。

「そうかな？ あ、それとね、鬼の四天王の勇儀さんにも会えたんだよ。それでね……」

にとりはさらに話し出す。柊はそれを楽しそうに聞いていた。

「……でさ、勇儀さんがグイーツって竿を引くとさ……でっかい水しぶきをバツシャーン！ ってたててさ……見たこともないくらいでっかい魚がさ、グワーツ！ って口を開けてこっちに迫ってくるわけ。それを勇儀さんが拳でドグシャアッ！ って殴って倒したのかっこいいでしょ？」

「……その勇儀さんの一本釣りの話、もう七回は聞いたよ……」

べろべろに酔っ払ったにとりの話にうんざりした柊はちびちびと酒を啜りながら言う。座敷にはにとりが飲み干した空のビール瓶が数本置かれていた。

「ふえ？ そうだっけ？ ……むぐう……」

にとりはぐつたりと空の皿に突っ伏する。かすかに寝息も聞こえ始める。

「にとり？ ……寝ちゃったか。しゃべるだけしゃべって、まったくいいご身分だねえ……。すいません、お勘定」

「へい」

柊は伝票に記された酒の安さに驚いた。さすがは街じゅうが宴会会場と呼ばれるだけのことはある。

「よつと」

柊は酔いつぶれたにとりをおぶって居酒屋を出る。まだまだ宵の口といったところだろうか、旧都のどんちゃん騒ぎは済みそうになり。

「こつも賑やかだと、逆にちょっといづらくなっちゃなあ……」
柊は喧騒にかき消されるほど小さくつぶやいた。

旧都（後書き）

台風が近づいていて風が強いですね。（9月3日現在）
さかまたです。

今回は茨華仙さんに登場していただきましたが……ただの他人の話
を聞かないキャラになってしまいましたね……。
それと勇儀とパルスィは短編を別所で書いてからまた書きたいなあ、
と思っていたキャラでしたのでなかなか楽しく書けました。

秋めく山

気がつくにとりは地上へと繋がる大穴を、蜘蛛の糸を伝って登っていた。酔いが残っているせいか頭が痛い。ふと頭上を見ると出口からかすかに差し込む光が目に染みた。

登りきるにはあとどれだけかかるだろうか。半分以上は登ってきたと思っていたが、一向に出口に近づいた気がしない。

にとりはふう、と糸を手繰るのを止め一息つく。片手についている土の壁がひんやりとして心地よい。

「あらあら、こんなところで蜘蛛の糸にぶら下がって、何がしたいのかしらん？」

しばらく休んでいたにとりが驚いて顔を上げると、雛がにとりを見ていた。表情は良く見えなかったが、どこことなく背筋が凍るような、不気味な雰囲気が出た。

しばらく休んでいたにとりが驚いて顔を上げると、雛がにとりを見ていた。表情は良く見えなかったが、どこことなく背筋が凍るような、不気味な雰囲気がした。

にとりは恐る恐る厄集めはしなくていいのか、と訊こうとしたが、どうしたことが声が出ない。いよいよ気味が悪くなってきた。片手をつけている土のひんやりとした感触すら気持ち悪く感じてくる。

「でも蜘蛛の糸なんかでこの大穴を登りきろうなんて、にとりも命知らずねえ」

雛が糸を指でなぞり、はじく。

やめて、にとりは叫ぶ。が、声は出ない。心臓を直に握られているような感覚。蜘蛛の糸がそう簡単に切れないことはわかっていて、それでも、雛が糸を揺らす度に恐怖を感じる。

「やめろって言ってるのがわかんないの！？　その手を放せっつてんだよッ！」

自分でも驚くほどの大声でにとりは叫んだ。すると突然糸がぷつり、と音をたてて切れ、ぐらりと体制が崩れる。

背中に寒い感覚が広がり、全身からさっと血の気が引いたあと、嫌な浮遊感がにとりを支配した。

「うわぁッ！」

びくん、と痙攣したように体が跳ねた。にとりは息を切らしながらゆっくりと首を左右に動かし、周りを見回す。まだ背中には嫌な寒気が残っている。

一人で暮らすには少し広い空間を無駄に、窮屈に、そして雑然と並べられた雑貨や発明品、なるほど確かに自分の部屋だ。

「……夢か」

ほっと胸を撫で下ろす。本当にあの高さから頭から落ちたら、嫌でも地獄にずっと住むことになったんだろうな、そんなことを思うにとりは笑った。

少し緊張がほぐれ、急に視界が広がった気がした。にとりは窓の外を見る。

空は青く晴れ渡っていた。木々の鮮やかな緑と所々に見え始めた薄紅葉がまぶしい。紅葉の秋、と呼ぶには程遠いが、秋を感じさせるには十分だ。

「静かなあ……」

静けさの中、にとりは一人呟いた。地底にいた時は騒がしいと感じたが、帰ってきた今となつてはその喧騒すら懐かしく思えてくる。結局あのは二日酔いで寝込んでたなあ、などとしばらく地底での出来事を思い起こしていたにとりだったが、ずっと感傷に浸っていてもなあ、と思い普段着に着替え、出来合いの物で食事を済ませ

ると、行くあてもなく外に出ることにした。家を出た途端、涼しげな秋風がにとりを包む。

さて、今日は何をして過ごそうか。

鍵山雛は風に髪を、裾をなびかせながら楽しそうに踊っていた。足下で無数に咲くコスモスもまた風に揺られ、踊る。

山中に密やかに存在するこの花畑は、季節ごとに色を変える。春は菜の花が黄色に、夏は雛げしが紅色に、秋はコスモスが青紫に、そして草木が眠る冬は雪が真っ白に、それぞれ鮮やかに彩る。雛はそんな四季折々の変化を見せるこの場所が好きだった。

「あら雛、ごきげんよう」

「秋はいいものでしょう？」

声に気づいた雛は踊りを止め空を見上げると、彼女と同じく神である秋静葉と秋穰子が寄り添うように飛んでいた。二人はたわわに穂った麦の穂のように輝く揃いの金色の髪を揺らし、雛に笑いかける。

「あら、静葉に穰子じゃない。ごきげんよう。最近めつきり山が秋めいてきたけれど、あなた達の仕業かしら？」

雛も笑い返す。彼女たちは秋以外はあまり外を出歩かないため、雛がこうして会うのも久しぶりだ。

「そうね、確かに私は滝の周りを秋めかせてきたわ。これがほんとのフォールオブフォール、ってやつね！」

静葉が「決まった！」という顔をする。花畑を秋とは思えないほど肌寒い風が吹き抜け、微かにコスモスが揺れた。

「……静葉、どうしたの？ いきなりドヤ顔しちゃって」

「焼き芋の食べすぎかしら？」

暫しの硬直の後、雛と穰子は揃って首を傾げた。

「……好き勝手言ってくれるじゃない。私が渾身のギャグをかまし
たっていうのに。あと穰子、焼き芋の食べすぎなのはあんたよ、あ
んた」

そのまま静葉はふて腐れた顔をしながら地に足をつける。すると
ふっと風が吹き、静葉の足下の紅葉が舞った。

「ギャグ？ どこが？」

「どこかしらね、雛さん」

雛と穰子は再び揃って首を傾げる。

「……あんたたち、まさかやった本人にギャグの説明させるの？」

「そうよ。何か問題でもあるの？」

「だって姉さん、わからないもの」

怪訝そうに静葉が二人の顔を覗き込むようにしてきくと、すぐに
答えが返ってきた。

「あんたらねえ……自分で自分のギャグを説明する虚しさがわから
ないの？」

「全然。あなたが冬を毛嫌いする気持ちくらいわからないわ」

「姉さん、私もよ」

「またも即答。」

「ぬう……天然コンビめ……あんたらは喋ってるだけでもギャグに
なるっての。いいわ、教えてあげる」

静葉はだるそうにどっかりと腰を下ろすと、つられて雛と穰子も
ゆっくりと腰を下ろす。

「いい？ まず秋は英語で『fall』よね」

「せんせー、秋は『おーたむ』じゃないんですかー？」

穰子が手を上げてきく。

「そうともいう。で、滝のことも『fall』っていうの」

「……それで？」

静葉が穰子の質問を軽くないなすと、今度は雛が寝そべって頬杖を
突きながらきく。

「それでつて……『fall』がダブルミーニングになってるでしょ？　それがオチ」

「わかりづらいし、そこまで面白くもないわね」

「ぐはあっ！」

雛の齒に衣着せぬ言葉に静葉は仰向けに倒れ込む。

「姉さん気をたしかに！」

穰子は駆け寄って静葉を抱き起こすと、芝居掛かった口調で言った。

「くつ、やっと我が世の春が来たつてのにこの厄神ときたら……」
静葉は呪うように呟く。

「落ちていて姉さん、今は秋よ」

「穰子。そりや比喻よ、比喻……もう、なんか思いつきり疲れたわ。穰子、人里に行つてちやほやしてもらいましょ」

静葉は穰子の手を借りて起き上がる。

「それはいい考えね。……それじゃ雛さん、そういうわけだからごきげんよう」

「ええ、さようなら」

雛は飛び去っていく二人に手を振った。空には紅葉の赤が舞っていた。

犬走雛は哨戒の仕事のかたわら、空から衣替えを始めた妖怪の山を眺めていた。麓にはまだ緑が残っているが、山の頂に近づくにつれ紅葉が目立ちはじめ、中腹の辺りなどもう秋の盛りと言っても過言ないほど鮮やかだ。秋の神がおわすのはあの辺りなのだろうか、と雛は思った。哨戒の仕事は千里先を見渡す程度の能力の持ち主である彼女に重点的に割り当てられる。天狗の縄張りに近づく者を

素早く発見し、排除する。広い視界を持つ彼女にはうってつけの仕事だ。

とはいってもそのように危害を与えようとする妖怪も人間も今は滅多に現れない。そのため柊はよくぼんやりと山を眺めていることが多い。

柊は軽く伸びをすると、休憩のために一度山に降りることにした。休むのにちょうどいい太さの枝にとまり腰かけると、柊は弁当箱代わりの笹の葉の包みを解いた。今日の昼食は握り飯が二つだった。腹持ちは良いが、物足りない。

「……干し肉でも持って来ればよかったな」

柊は握り飯を頬張りながらも周りを警戒している。

「……む」

柊の耳が微かに動き、穏やかそうな目つきが鋭く変わる。縄張りに近づく者を発見したのだ。

柊は腰に提げた反り身の刀を抜き、こほん、と一つ咳払いをした後、侵入者の近くの枝に飛び移る。一本歯の高下駄で細い枝に立つ、こつした人間には到底できない「天狗らしさ」を出すのも警戒天狗には肝要だ。

「おい、その人間。ここから先は天狗の縄張りだ。早々に立ち去ってもらおうか」

柊はどすの効いた声で侵入者に声をかけた。

にとりは川で水切りをして遊んでいた。

手を離れた石が十数回水面を跳ね、沈む。手首のスナップを利かせて石を投げ水面を跳ねた回数を競う、これだけの遊びなのにどうしてこつも奥が深いのか。もし石を水切りに最適な重さ、形状に極限

まで加工して、力学的に完璧なフォームで投げたらどれだけ跳ねるのだろうか、想像しただけでにとりは楽しくなってくる。

「よし、今日は水切りに最適な投げ方を研究……おや？」

にとりが張り切っていると、陽の光を反射して輝く川の上流から、鮮やかに紅く色づいた紅葉が数枚さらさらと流れてきた。

「綺麗な紅葉……山の奥はもう秋真っ盛りなのかな？」

にとりは川に入って紅葉を拾い上げると、周りの木々を見る。葉の先が微かに色づいていたり、まだ青かったりとまちまちであり、ここも紅葉の秋には程遠い。

水切りの件はまた今度考えることにしたにとりは川岸を紅葉が流れてきた方向へ歩き始めた。

「紅葉がたくさん落ちてたら集めて焼き芋でもしようかなー」
にとりにとっての秋は、食欲の秋だった。

彼は森の中を歩いていて、踏むとサクサクと音をたてる落ち葉が秋を感じさせるが、木々の間から見える空は真夏のように高い。

山全体が燃え上がるような紅葉で色めくようになるのはいつだろうか、地獄に遊びに行つてくると言つてからしばらく会っていない親友は元気だろうか、などと考えながら、彼は山の奥へ奥へと足を進めていった。

彼にとっての秋は、紅葉の秋。

秋めく山（後書き）

ずいぶんと更新が滞ってしまいましたね。すいませんでした。
書き始めた頃は秋の初めだったんですが、もう中ごろにまでなっ
てしまいました。

余談ですが、今年の秋は寒いですね。毎年言っているような気も
しますが……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5753t/>

河城にとりの科学的？生活

2011年10月10日03時24分発行